

ガンダムごっこに関する研究（その一）

——ガンダムごっこに関する保育者のイメージ——

村松三恵子
太田 恵子

▲研究のねらい▼

子どもたちは、日常保育のさまざまな場面で、テレビの登場人物に扮した「こっこ遊び」を展開しています。

なかでも格闘シーンを中心とするテレビ番組の登場人物に扮して遊ぶ活動は、子どもが好んで展開する活動の一つです。しかし、この活動に関する叙述は、きわめて限られました形でしか取り扱われていませんし、体系的な研究は

皆無に等しい現状です。たとえば過去五年間に刊行された雑誌、著作物から関連記事を当つてみますと、この種

の遊びは、おおよそ次の三つの範ちゅうの中取り扱われているように思います。

一、テレビの及ぼす悪影響の具体例として。

二、変身あそびに位置づけて、その事例として。

三、保育者の指導例として。

このように闘いあそびは「TV」とか「変身あそび」

か、あるいは「指導」というフィルターを通して扱われており、このあそび自体の分析が充分にすすんでいません。

保育者に即して言えば、闘いあそびに関する基本的知識をもたぬまま、日々この活動をとらえ、かかわっている現状であるということができます。そこで、本研究は、保育者に求められている闘いあそびに関する情報の実態を明らかにするために、「保育者がこのあそびにどのようなイメージをもつてているか」を、次の五つの観点から明らかにすることをねらいとしました。

- 一、活動の有無について。
- 二、保育室内の活動として、どのような応対を必要とする活動とみてているかについて。
- 三、どのような意味をもつてているかについて。
- 四、どのような学習の必要のある活動とみているかについて。
- 五、保育者のこのあそびの意味づけ方と、このあそびの対処との関連について。

▲研究方法▼

前述の五項目について自由記述方式による質問紙を作成し、横浜市中区の幼稚園一三園に、各五枚ずつ計六五枚配布しました。回収率は四九%で三二枚が回収されました。

▲研究結果▼

第一に、「活動の有無」については、三二名中三〇名の保育者が、この活動の存在を認められており（表-1 参照）、この活動が保育室で認知されていることが伺われます。第二に、「闘いあそびに対する具体的な対応のしかた」については、表-2をご覧ください。この表は、回答者三二名の延べ一八七の対応を、かかわり方のレベルによって、積極的からその他まで五つに分け、さらにその時の闘いあそびの様態別に集計したものです。これによりますと、延べ一八七の対応中、七一%に当たる対応が直接のかかわりで、積極的・中立的・拒否的か

かわり方がほぼ等分に分布しています。また、子どもの遊びの様態別に保育者のかかわり方の傾向をみていきますと、次のような四つの特色がみられます。

①「バキュー」とか「バーン」というような音声による働きかけには、「やられたー！」といつて倒れたり、同じようにやり返すなどの応対・応戦といった積極的なかかわり方が圧倒的多数を占めています。

②キックやチョップ、またはその真似ごとをするというような身振りによる働きかけには、約束・注意・禁止などの拒否的なかかわり方が多く、次いで傍観が多いことがわかります。

③闘いあそびに必要な物の要求に関しては、要求をしてきた子どもにその使用目的を尋ねたり、新聞紙・広告紙・ダンボール等の素材を渡すなど、中立的なかかわりが大半を占めています。

④けんかについては、子ども同志で話し合いをさせる等の中立的なかかわりと、危険が伴わない限り見守るといった傍観的な対処が圧倒的多数を占めています。

以上のことから全体をみると、闘いあそびがどのような形態をとって展開するかによって保育者のかかわりは異なり、保育者は自らのかかわりを調整していることがわかります。つまり、音声に対しては最も積極的に、身振りに対しては拒否的・傍観的なかかわりを示す傾向が強く、物の要求については中立的、または消極的であることです。第三に「保育者がガンドムに代表される闘いを中心としたあそびにどのような意味を認めているか」については、自由記述したものの傾向を分類すると、子どもに即して活動の意味を見い出している場合と、保育者側に即している場合とに大別され（表—3参照）、前者、すなわち子どもに即して意味をとらえていた場合が圧倒的に多いことがわかりました。また、子どもに即して意味をとらえている場合、子ども同志のつながりが深まるというように、子どもたちの対人関係に意味ありとする保育者が多いこともわかります。第四に「このあそびに関する学習の必要の是非」については、三三一名の回答者のうち、約七二%の一二三名がこの遊びに

関する学習の必要を認めており（表—4参照）、保育者は

このあそびの認識を深める必要性をはつきりと自覚して

いることを示唆しています。また、学習力不必要と回答

した人の理由は、この活動を子どもたちだけですすめるべきであるから無干渉でよいとするものです。第五に「保育者のこのあそびの意味づけ方もそのあそびへの対処のしかたとの関連」については、その活動の意味を子ども中心にとらえるか、保育者中心にとらえるかによって、あそびへのかかわり方が著しく異なります（表—5 参照）。子ども中心にその意味をとらえている者が合計七〇の対応をしているのに対して、保育者中心にその意味をとらえている者は、四分の一の一六の対応しか示していません。また、活動の意味づけ方とかかわり方との関連については、闘いあそびの意味を記入しているといふことにかかわらず、音声では積極的、身振りでは拒否的・傍観的なかわりが多く、物の要求に関しては中立的ななかわりが多い傾向がみられ、従つてこのあそびは、意味を意識してもしなくとも、かかわり方を均一に

する強力な働きがあると考えられます。

▲考察と展望▼

以上のことと要約してみると、第一に保育者はそのあそびを、単に乱暴なあそび、または人を傷つけるあそびと決めつけず、むしろ、子どもたちの対人関係にとつて意味ある活動とみてること、しかし第二に、このあそびに関する認識の不足は、保育者がはつきりと自覚しており、そのあそびが意味ある活動と感じつつも、どのように対処したらよいかわからないままかかわっている現状であること。そして第三に、保育者がこの活動の中に「危険」な場面を見い出すか否かで、かかわりが大きく変化する傾向のあることです。つまり「危ない」と思つた瞬間から保育者は拒否的なかかわりをしたり、あそびに使う物の要求に対しては、一様に「紙」という素材を与え、危険度をやわらげる配慮を無意識のうちに行つており、音声に対しては積極的、身振りに対しては拒否的・傍観的物の要求に対しては中立的と、そのふるまい

方にステレオタイプの傾向がみられることがわかりました。

以上の研究結果から、今後の研究方向として、保育者が直観的にとらえている闊いあそびの対人関係の発展における意味に注目して活動の経過を詳細にとらえていくことの重要性が示唆されているように思われます。

(横浜学園付属元町幼稚園)

表 1

承認	否定	無記入	合計
30	0	2	32

表 2

対処		様態	音声	身振り	物の要求	けんか	合計
かかわる	積極的	37	5	0	0	42	
	中立的	0	6	19	21	46	
	拒否的	2	29	8	6	45	
傍観		2	10	8	18	38	
その他		5	1	4	6	16	
合計		46	51	39	51	187	

回答者32名が延187の対応を示している。

表 3

子どもに即して		保育者に即して		その他	無記入	合計
(1)ー1 自己の願望 実現	(1)ー2 対人関係的	(2)ー1 道徳的	(2)ー2 保育手段的	/	/	/
7	9	3	1			
16		4		5	7	32

表 4

(1) 必要あり			(2) 必要なし			無記入	合計
保育者の認識の深化	あそびの発展・健全化	平和教育	未分類	無干渉	無 視	無記入	
13	3	2	5	3	1	1	
23			5			4	32

表 5

様 態	音 声	身 振 り	物 の 要 求	合 計
対処 意味付	a d c b e f	a b c d e f	a b c d e f	
自己願望実現	9 1 1	3 1 5 1	5 3 1	30
対人関係	10 1 1 1	3 1 8 4	8 3	40
道徳的	2 1 1	4 1	3	12
保育手段的	1	1	2	4
その他	6 1	1 4 1 1	4 1 1	20 20
無記入	10	2 7 3	5 1 2	30 30
合 計	37 0 2 2 2 3	7 4 29 10 0 1	0 27 8 0 0 4	136
	46	51	39	

注 対処 a ……積極的かかわり
 対処 b ……中立的かかわり
 対処 c ……拒否的かかわり

対処 d ……傍観
 対処 e ……その他
 対処 f ……無記入